

デンマーク・コペンハーゲン出土の 有田磁器

高 島 裕 之*

はじめに

ヨーロッパの中でアジア産陶磁器に関する研究は、オランダ、イギリスをはじめとする西欧地域で、消費遺跡から出土する資料が検討され、深化されてきた(堀内・金田 2016)。対して北欧地域はアジア産陶磁器の受容範囲の境界であり、ヨーロッパのどこまで流通したかを追うことも重要な課題で、アジア側からの埋蔵文化財および、博物館所蔵資料の基礎的理解をより推進していく必要があるように思う。日本で作られた有田磁器についても、イギリス、オランダ、ドイツなどのコレクションは広く知られているが(柿右衛門様式磁器調査委員会 2009)、ヨーロッパの他地域ではどのような受容の姿があるのだろうか。

2016年に Rikke Søndergaard Kristensen 氏の “Made in China: import, distribution and consumption of Chinese porcelain in Copenhagen c. 1600–1760” という論文を拝見し、デンマークのコペンハーゲン (København) で中国磁器が発掘調査で出土していることを知った。そして実際に連絡をさせていただき、当時コペンハーゲン市立博物館に勤務されていた Thomas Roland 氏を通じて2016年10月に資料を実見する機会を得た。そして中国磁器の中に日本の有田磁器を発見するにいった。

*専修大学文学部教授

調査を進めるにあたっては、デンマークの Rikke Søndergaard Kristensen 氏, Thomas Roland 氏, オランダのイェジー・ガヴロンスキー (Prof. dr. Jerzy Gawronski) 教授, クリスチアーン・ユルグ (Prof. dr. Christiaan J. A. Jörg) 教授やインディペンデント・リサーチャーの金田明美氏, そしてそれぞれコペンハーゲン市立博物館 (Museum of Copenhagen), フローニンゲン博物館 (Groninger Museum), アムステルダム市考古局 (Municipality of Amsterdam, Office Monuments and Archeology) の方々に援助いただいた。

1. デンマークのアジア産陶器交易

デンマークはヨーロッパ間貿易ルートである北海からバルト海への出入口に位置し、交通の要であるエーアソン海峡を往来する船から海峡通行税を取っていた。シェークスピアの『ハムレット』の舞台としても著名なヘルシンエア (Helsingør) のクロンボー城は、通行税を徴収するために造られた。コペンハーゲンはデンマークの首都であり、デンマーク語で「商人の港」という地名の意味がある。アジアとの交易には17世紀の早い段階から取り組み、DEIC (デンマーク東インド会社) は1616年に設立された。本拠地をインドのトランクェバル (Tranquebar) に1620年においている。1650年に一度解散した後、1670年に再建、1729年まで続いている。その後 DAC (アジア会社) という形で1730、1732年に再編され、1730～1760年の間は、広東にオフィスを置き、中国との直接取引を行なった。解散したのは1843年である (Kristensen 2014. p. 154)。デンマーク史で商業的な「繁栄期」は、18世紀後期と捉えられている (井上 2015. p. 345)^(注1)。

Rikke Søndergaard Kristensen 氏は、初期の中国瓷器の入手方法としてデンマーク東インド会社による交易以外にオランダを起源とするルートを想定している (Kristensen 2014. p. 156)。また中国瓷器資料について、デ



図2 Museum of Copenhagen(2016年)



図3 Frederiksstadens 地点(2016年)

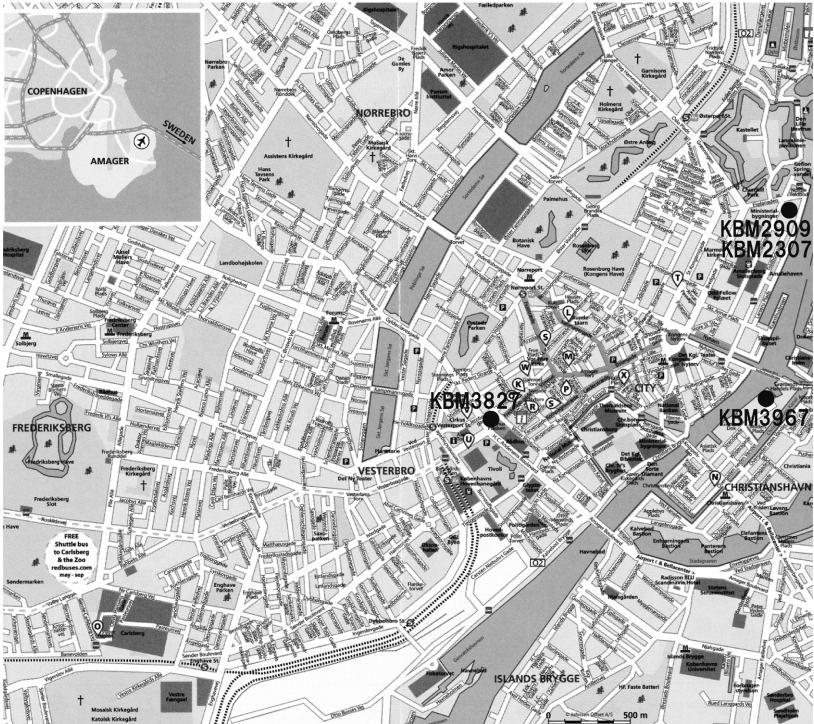


図1 コペンハーゲン市街地図 (EASY MAP より作成)

●は、発掘調査で中国瓷器が確認されている地点。有田磁器は KBM2307 で出土。

ンマークと中国の直接貿易ルートが確立する1730年を境として、2つのグループに分けて見解を示している (Kristensen 2014. p. 153)。

中国瓷器は市内の Kroyer Plads (KBM3967), City Hall (KBM3827), Frederiksstadten (KBM2307・KBM2909) の3地点で出土していて (図1), コペンハーゲン市立博物館で資料を閲覧することができる (図2)^(注2)。日本の有田磁器は, Frederiksstadten (KBM2307) 地点の資料の中に確認した。

2. コペンハーゲン出土の有田磁器

Frederiksstadten (KBM2307) 地点は, カステレット要塞や観光スポットとして著名な人魚姫の像の南側の地点であり, 18世紀後半, 1749年以降に貴族や裕福な商人の住宅地となった所である (図3)。北部の Esplanaden には, 正式な大きなゴミ捨て場があった。発掘面積は1haで, 15回の発掘調査で住宅地となる前の継続的な埋め立て時のゴミの厚い層が発見されている。堆積物は少なくとも20,000m³あるという (Kristensen 2014. p. 152)。ゴミ捨て場の利用者は, この地域の人以外にも, 他の市街地の人も含むという。最初は湿地であったが, 埋め立てが17世紀半ばから18世紀まで行なわれた。中国瓷器は1,132個体確認され, 年代は18世紀前半に集中し, 康熙様式の製品が多く, 青花瓷器が80%を占める。外面を茶褐色釉で覆うバタヴィアウェアや, チャイニーズイマリも確認されている (Kristensen 2014. p. 158)。康熙様式の瓷器について, 間接貿易を通じてコペンハーゲンに來たいくつかの可能性が指摘されている。まずオランダ東インド会社によって大量に取引された康熙様式瓷器がコペンハーゲンに輸出された可能性, さらにオランダ東インド会社で働いていたデンマークの船員による個人貿易の可能性, そしてイギリス東インド会社がデンマークの船を用いて航海した時に入手された可能性である (Kristensen 2014. p. 160-161)。

確認できた有田磁器は実見した結果、個体としては3点である。3点とも Frederiksstad 地点のフィールド23・24地区で確認されている。その全てが1670～1690年代の生産年代が推定でき、有田の内山地区および南川原山地区で焼成された製品と考えられる。次に詳細を述べる。

・資料番号：KBM2307 x50.001, x50.002, x50.003（図4・図5）

それぞれ染付芙蓉手皿の腰部破片で、同一個体と考えられる。内側面の区画内の文様は丁寧に施されるが3点とも異なっていて、x50.001は、花を囲む小さな葉が描かれている。区画の外側と瓔珞文の間は丁寧に淡い青色の濃みが入る。外側面は唐草文を描き、腰部に圏線がめぐる。x50.002は、雑宝文が描かれる。外側面には文様がなく、唐草文の途切れた余白部分と考えられる。x50.003は、雑宝および周辺のリボン状の表現がみられる。それぞれ折縁となる部分のみ残存しており、口沿部は割れている。破片の厚みから皿の寸法が推測でき、口径35cm程度となる。x50.001とx50.003は、下部に修復の際の接着剤の痕跡を残していて、近接する破片と考えられる。外側面文様として中国景德鎮窯の製品とは異なり唐草文様を描くことから、有田磁器であると解る。施文の方法に精粗の差があるが、オランダ・フローニンゲン博物館所蔵資料（資料番号1987.0046）のように、唐草文を2方向に配置する例であろう（図6-1）。

・資料番号：KBM2307 x50.022（図4・図5）

色絵染付皿の口沿部破片で、型打ち成形が行なわれ、外側面文様も丁寧であるその特徴から、有田南川原山で生産されたと推測される。内面には濃い青色に発色した輪花の形に沿った二重染付線と共に、色絵で竜文に伴なう雲が描かれている。色絵部分には薄い赤色絵具の下地の痕跡と黒く変色した絵具が残る。類例から黒ずんだ絵具は緑または黄で、赤と組み合わせる形であろう。外側面文様は線描きと濃みで丁寧に描かれた染付唐草文

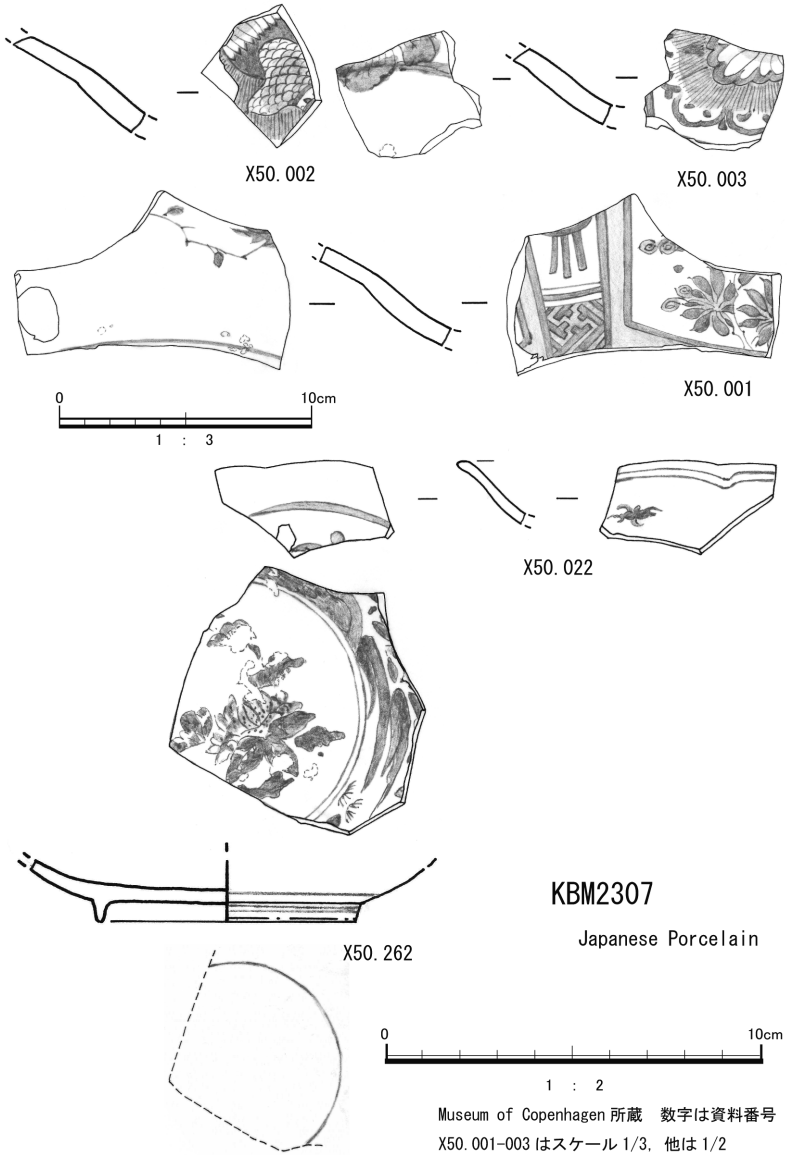
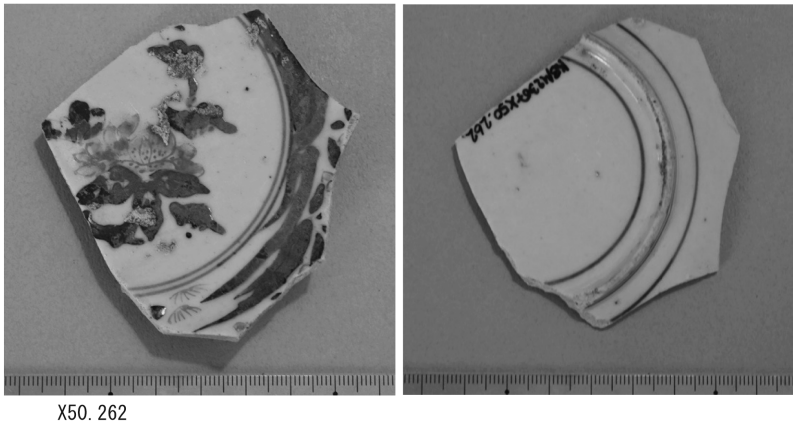
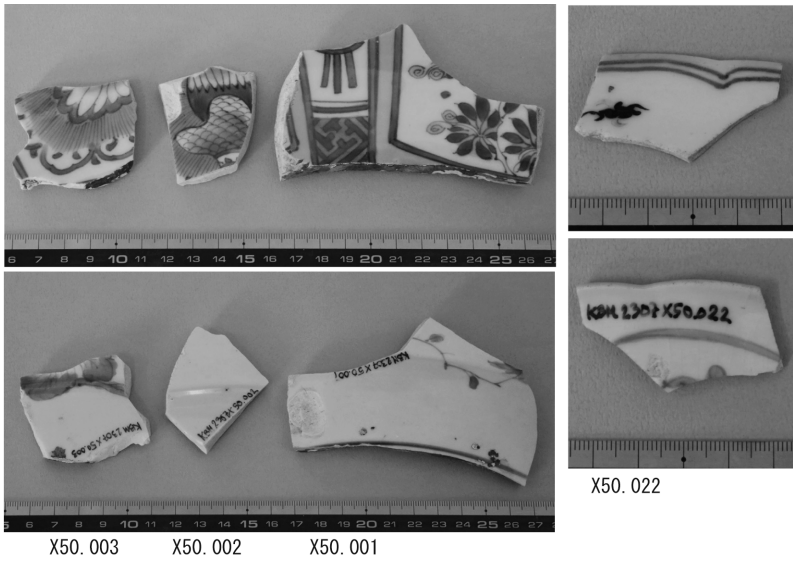


図4 コペンハーゲン出土の有田磁器 実測図



KBM2307 Japanese Porcelain

Museum of Copenhagen 所蔵 数字は資料番号

図5 コペンハーゲン出土の有田磁器 写真

である。内面に比べ淡い青色で発色する。類例と考えられるのが佐賀県立九州陶磁文化館柴田夫妻コレクションの色絵雲龍宝珠文輪花皿（収蔵番号03800）であり、内側面文様，外側面文様が一致する（図6-2）。

・資料番号 KBM2307 x50.262（図4・図5）

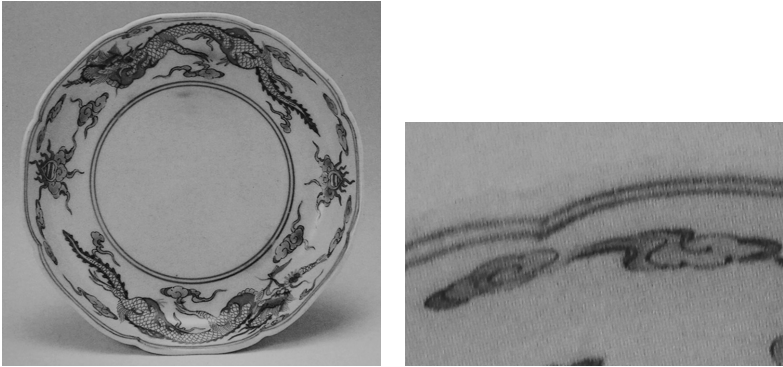
色絵染付皿の底部破片で推定高台径6.8cm，残存高さ1.6cmである。高台の形は三角形である。推定高台径からおそらく口径15cm前後となると考えられる。内面は染付で二重円圏を描き，色絵で円圏内に牡丹，外側に土坡と花卉文を描いている。牡丹花は赤の顔料で描かれているが，周辺に配置される葉は黒ずみ，剥落した箇所もある。おそらく元の色は緑であると推測できる。内側面文様も赤色以外の絵具は黒ずみ，元の色が失われている。3種程度の複数の色が確認できるようであり，緑，黄，青に該当すると考えられる。外面は高台内に染付で一重円圏を描き，高台外側に圏線2，腰部1の染付線が巡る。文様の配置が類似する例は寸法が異なるが，オランダ・フローニンゲン博物館所蔵資料にあり，資料番号1987.0062の色絵染付輪花皿は，内底に牡丹枝を描き，内側面には土坡と松竹梅を配する（Jörg 2003. p.88）。資料番号1987.0063の色絵染付輪花皿は，内底の文様は岩牡丹を配置する形で，内側面の土坡が染付であり，高台内銘「大明成化年製」がある点は異なっている（Jörg 2003. p.89）。資料番号1991.0017の色絵染付丸皿は，円圏内の花の種類が梅樹となるが，文様の配置は類似している（Jörg 2003. p.76）（図6-3）。

他に Frederiksstad（KBM2307）地点の発掘調査報告書では「日本磁器」と記されている例で，x50.032，x50.224，x50.227がある（Høst-Madsen 2012. p.79・86）。x50.224，x50.227は実見し，中国製であることを確認できているが，x50.032は実見できていないため，今後の課題としたい。

1. X50.001-003の類例（Groninger Museum. 資料番号1987.0046）



2. X50.022の類例（佐賀県立九州陶磁文化館柴田夫妻コレクション収蔵番号03800）



3. X50.262の類例（Groninger Museum. 資料番号1987.0063（左）1991.0017（右））



図6 コペンハーゲン出土の有田磁器破片の参考資料

おわりに

近年調査資料のカタログ（Gawronski・Kranendonk 2018）が出版されたオランダ・アムステルダム地下鉄南北線工事に伴う発掘では、Damerak, Rokin の2地点から日本の磁器製品が169個体確認されており、器種では皿、大皿、髷皿、カップ&ソーサー、壺、壺蓋、手付瓶、瓶、チェンバーポット、ミニチュア置物、アルバレロ壺などがある。生産年代の幅も17世紀から20世紀までと広く、新しい年代の資料では「MADE IN JAPAN」と入る瀬戸の製品もある。オランダ東インド会社本社のあるアムステルダムを流れるアムステル川に断続的に廃棄された資料であり、単純な比較はできないが、多種多様な様相は、コペンハーゲンの出土状況を考えるうえで有効である^(注3)。

今回提示したコペンハーゲンで確認されている有田磁器の資料の年代が1670年代～1690年代であり、現状では18世紀以降の製品が確認できていない。また確認できた有田磁器の器種は皿に限定され、色絵染付皿や丁寧な施描の染付芙蓉手皿であり、比較的高い品質の製品である。そして染付芙蓉手皿にみられる修復痕からも、有田磁器が頻繁に入手できる状況は想像しにくく、限定される年代の中で持ち込まれたことが考えられる。

また入手方法としては、デンマーク東インド会社が有田磁器の取引に直接関わるルートは確認できないため、オランダを起源として持ち込まれるルート、個人貿易品としてデンマーク東インド会社船の乗組員がインドやインドネシアで買い付けた可能性などがある。そして18世紀前半に廃棄された出土状況からは、19世紀以降にコレクションされたアンティークとは考えられないため、明らかに北欧の消費遺跡で消費された資料として位置づけることができ、コペンハーゲンまでは有田磁器が交易品として運ばれ、使用されていたことが明らかである。

先に筆者はスウェーデン・イエーテボリ沖で1745年に沈んだスウェーデン東インド会社の船イエーテボリ（Göteborg）号の有田磁器について実見し、1点のみ確認された船内での使用品であり、交易品ではないことを明らかにした（高島 2021. p.258）。イエーテボリでは市内の消費遺跡で中国瓷器が確認され、イエーテボリ市立博物館が所蔵している。その資料の再検討を進めることで、さらに北欧における有田磁器の流通の境界を明らかにしたいと考えている。そして17世紀後半～18世紀前半に貿易品としてヨーロッパに輸出された有田磁器の流通年代についても、デンマークも含めて北欧の中で限定されるのかどうか、見極めていくことが現在の課題である。

<付記>本稿は平成28年度相馬学術奨励基金海外研究員およびJSPS科研費JP17K03214の助成、令和3年度専修大学研究助成の研究成果の一部である。写真を掲載するにあたっては、コペンハーゲン市立博物館に連絡し、Jane Jark Clausen 氏に許可を得た。また佐賀県立九州陶磁文化館柴田夫妻コレクションの写真掲載許可の手続きに関しては、宮木貴史氏、山本文子氏にお世話になった。

<注>

- (1) デンマーク東インド会社の交易については、井上 2015. p.340. 表X-1 や松浦 2021a. pp.234-235, 松浦 2021b. pp.197-198にもまとめられている。
- (2) 図2写真は2016年に訪問した旧博物館であり、2021年現在博物館はリニューアル工事を終え、別地点の別の建物に移動している。
- (3) アムステルダム市の南北線工事に伴う発掘調査出土の日本磁器については、金田明美氏を介して、イェジャー・ガヴロンスキー教授、ペイター・クラネンドンク氏にご指導いただき、実際に実見する機会をいただいた。またオランダでの中国瓷器、有田磁器の出土様相の詳細は、金田 2015, 2016に詳しい。

<図出典>

- 図1 EASY MAP を用いて筆者作成。
- 図2・3 筆者写真撮影。
- 図4 Museum of Copenhagen 所蔵。筆者実測図作成。
- 図5 Museum of Copenhagen 所蔵。筆者写真撮影。

図6-1・6-3 Groninger Museum所蔵。筆者写真撮影。

図6-2 佐賀県立九州陶磁文化館所蔵。佐賀県立九州陶磁文化館1997『寄贈記念展 柴田コレクション（V）—延宝様式の成立と展開—』p. 70, 図80より転載。

<参考文献>

- 井上光子2015「知られざる海洋帝国の姿—近世デンマークの海峡支配と国際商業—」 斯波照雄・玉木俊明編『北海・バルト海の商業世界』悠書館, pp. 327-359
- 柿右衛門様式磁器調査委員会（大橋康二・鈴木由紀夫監修, 古橋千明編）2009『柿右衛門様式磁器調査報告—欧州篇—』九州産業大学 柿右衛門様式陶芸研究センター
- 金田明美2015「オランダ出土の東洋陶磁器—その流通と使用—」 佐々木達夫編『中近世陶磁器の考古学第1巻』雄山閣, pp. 279-302
- 金田明美2016「オランダの考古学陶磁器が語る流通・消費の具体像—オランダ・デイツェンター市出土の東洋陶磁器」 佐々木達夫編『中近世陶磁器の考古学第4巻』雄山閣, pp. 277-297
- 高島裕之2021「スウェーデン・イエーテボリ号出土陶磁器の研究」 佐々木達夫編『中近世陶磁器の考古学第14巻』雄山閣, pp. 251-266
- 徳永貞紹編2019『柴田夫妻コレクション総目録（増補改訂）』佐賀県立九州陶磁文化館 堀内秀樹・金田明美2016『『陶磁の道』以降のアジア—ヨーロッパ間の陶磁器研究と流通研究への視点』『東洋陶磁 VOL. 45』東洋陶磁学会, pp. 41-57
- 松浦章2021a「世界を席卷した中国・日本磁器」 佐々木達夫編『中近世陶磁器の考古学第14巻』雄山閣, pp. 227-249
- 松浦章2021b「清代中国陶磁器を輸送した西欧諸国の東インド会社船」 佐々木達夫編『中近世陶磁器の考古学第15巻』雄山閣, pp. 189-214
- Christiaan J.A. Jörg 2003 “*Fine & Curious Japanese Export Porcelain in Dutch Collections*” Hotei Publishing
- Jerzy Gawronski, Peter Kranendonk 2018 “*STUFF Catalogue Archaeological Finds Amsterdam's North/South Metro Line*” Van Zoetendaal/ De Harmonie Publishers
- Lene Høst-Madsen 2012 “*Beretning for den arkæologiske hovedudgravning af KBM 2307 Mærsk Hovedsæde/Københavns Sogn, Sokkelund Herred, Københavns amt*” Københavns Museum（デンマーク語）
- Rikke Søndergaard Kristensen 2014 “*Made in China: import, distribution and consumption of Chinese porcelain in Copenhagen c.1600-1760*”, *Post-Medieval Archaeology*, 48:1, pp.151-181 (Online)